

北米リーグの失敗にある。「今考えても北米リーグはいくつもおかしな点がありましたからね。ほとんどの国のリーグが外国人枠を2、3名にしていた時代に、我々はその正反対、アメリカ人は2名いれればいいというルールでしたから、健全な発展など望めるわけありません。しかし、実はそこに種が蒔かれていた点を見落としてはいけません。つまり、北米リーグの各チームがチケットセールスのターゲットを若者たちに絞っていたことで、70年代後半、リーグが消滅したにもかかわらず、若者の間でサッカーブームが起こったのです。そ

して、その時代にサッカーを始めた若者たちが、90年代に入るとトッププレイヤーに成長しました」ムアハウスさんによれば、これ以外にも、暗黒の80年代にアメリカサッカーの種まき現象がいくつか存在していたという。たとえば、北米リーグのプレーヤーだった人たちが行き場を失い、彼らの多くがユース年代の指導者になったということです。また、同じく元プレーヤーたちが活躍の場を移したインドアサッカーリーグが根強い人気を誇り、平均一万人以上の観衆を集めていたということもそうだ。「ワールドカップ開催ま

での10年間、インドアサッカーが「架け橋」の役割を果たしていたという意外な事実を聞くと、なるほど暗黒の時代の中にもしっかりと将来の礎が出来ていたことが分かる。そしてワールドカップ開催が決定すると、変化が現れ始めた。「私たちはメキシコが出場停止だった恩恵を受けて、90年のワールドカップで予想外の出場を果たしたのですが、そのときのメンバーはほとんどが大学サッカーの選手でした。もちろんこれは自慢すべきことではなくて、むしろ悪いことなのですが、選手交代も自由という白黒ルールを採用してい

た。コロソバスのクルー・スタジアム、ダラスのビザ・ハット・パークなどの専用スタジアムがあるが、2008年までには計6つになる予定だ、スタジアム整備という側面も、まずは着々と進歩を遂げているようだ。さて、そうすると、アメリカサッカーの未来を見つめる上で、やはり最大の鍵を握っているのがMLSであることは言うまでもないだろう。北米リーグの失敗を経験しているアメリカは、この96年に開幕したMLSをどのように発展させているのか。日本人のイメージとしては、引き分けの場合はシュートアウトで勝負を決するという、開幕当時

の一風変わったルールばかりが残っていて、決してMLSに対してポジティブな印象はない。しかしながら、日本人がヨーロッパばかりに目を向けている間に、MLSは紆余曲折を経ながらも、確実に進歩を遂げていた。その方法論は、実にユニークというか、アメリカ的な独自路線をとっている。「私たちシカゴ・ファイアーのオーナーは、AEGという投資グループです。AEGは、他にもヒューストン・ダイナモ、LAギャラクシーのオーナーでもあります。もっとも、以前は5、6チームを所有し、コロソバのフ

ンチャイズ権を売り、今年はニューヨークをレッドブルに売却、DCユナイテッドも現在売り出しているそうです」そう語るのは、シカゴ・ファイアーの広報部長ジョン・クルーダーさんだ。一瞬、さっぱり意味が理解できなかったが、よく聞けばこういうことらしい。まず、MLSでは一人のオーナーが何チームも所有しても問題はなく、オーナーはイコール、投資家(会社)に相当する。よって、MLSを見渡して投資の見込みがあるチームには十分な投資をするが、その逆のケースだとあっさり撤退することになってしまうのだ。



るレギュラーな大学サッカーの選手がワールドカップに出場していたのです。自国開催の94年のときもまだプロリーグはありませんでしたから、サッカー連盟が一手に選手を抱え、国内アマチュア選手をミルティノヴィッチ監督の下で毎日練習と試合を繰り返して強化していったのです。94年のワールドカップ開催の条件としてFIFAからはプロリーグの設立を要求されましたが、実際にスタートしたのは96年のことでしたからね。だから自国開催の94年も、数人の海外プロ選手と多くの国内アマというメンバー構成でした。今では考えられないこと

#### とすだけね」 完全なるアメリカンスタイルで プロリーグを確実に成長させる

そんなレギュラーな発展を遂げたアメリカサッカーだが、現在はMLSも浸透し始め、次のステップに踏み出す時期にあるとムアハウスさんは言う。「これから大事なのは、長期的な意味で、プレー環境とスタジアム整備だと考えています。特にサッカー専用スタジアムを増やすことが必要でしょうね。それがサッカーの発展に欠かせないと思います」プレー環境とは、MLSでもリザーブリー

グが設立されたことから分かるように、選手が試合をする舞台をもっと広げよう、ということだ。実はアメリカには、サッカー連盟が管轄するMLSとは別のリーグ組織、USL(ユナイテッド・サッカー・リーグ)が存在する。ロマーリオが移籍したことで話題になった、あのリーグだ。USL1部はプロリーグで、2部はセミプロ、3部にあるUSLは完全にアマのリーグという構成だ。歴史はMLSよりも古く、もう20年目を迎えるのだという。また、「一番の問題」というスタジアム整備については、現在LAのホーム・デポ・セ

ビジネスライクというか、これは、ヨーロッパや南米、あるいは日本でも理解し難いシステムだと言える。ただし、投資と言っても、オーナーが直接お気に入りのチームに投資できるわけではない、ここが「ミソ」で、このあたりの話は、連盟のムアハウスさんが詳しく説明してくれた。「MLSでは、オーナー、スポンサー、ファン全員が資金を投じ、リーグの運営のためにその資金をMLSにプールしておく「シングル・エンティティ」というシステムを採用しているのです。これはリーグがチーム運営をするシステムで、すべての投資金をリー

グに集め、それを各チームに分配することになっています。北米リーグでは、ニューヨーク・コスモスが莫大な資金力を持ち、その他のチームは資金難に悩んでいます。つまり大事なのは、競争力を持たせることだと考えたのです。どのチームも他のチームよりも多額な資金を抱えてはいけません。小切手とチーム力はほどよくバランスが保たれなくてははいけません。そこに、アイデアが潜んでいるのです」MLSがいかにかユニークなシステムで運営されているか、お分かりだろうか。要するに、すべての資金はリーグにプールされてい

て、だから選手との契約もリーグ経由の契約となり、それは移籍金やテレビ放映権、スポンサーに至っても、共通のルールに則っているのだ。ユニフォーム・スポンサーは個別に存在せず、選手の移籍もリーグが最終的にコントロールする。新人選手獲得が、前年の最下位から選択できるというドラフト制度を採用しているのも、チーム戦力のバランスを重視しているからだという。これでは、毎年優勝するようなビッグクラブは生まれにくい、選手個人の報酬もサラーキャップ制があるため、突出したス